

- 1 [あをによし奈良の夏空かくも青き]
- 2 [なみおとになみたはぶれてなつのくれ]
- 3 [蠅の足蠅の躰を欠きてあり]
- 4 [さはれずの墓たちのぼる紫雲英田は]
- 5 [柚子の花骨壺に骨ひとりぶん]
- 6 [蜘蛛おのが虚空を抱きて果てありぬ]
- 7 [アイスクリーム古着屋の裏が海]
- 8 [木苺の花の苺になるところ]
- 9 [われの影われよりも美し土佐夕焼]
- 10 [バベル以後塔のかなしさつばくらめ]
- 11 [どの紙も紙飛行機を秘め夏は]
- 12 [百日紅佳き平仮名にぐりとぐら]
- 13 [まどろみが夏風邪の子をふうと容れ]
- 14 [ひとやすみすれば日暮の夏の海]
- 15 [けふよりの旅靴に竹落葉かな]
- 16 [日本に歳時記のありバナナむく]
- 17 [哲学者その妻の名の涼しかり]
- 18 [翻訳を経て名文やおじぎ草]
- 19 [舐めて酸き己がくちびる炎天下]
- 20 [ぬばたまといふ言葉あり遠火花]
- 21 [なにようもなき梅雨の夜の長電話]
- 22 [六月出土梅雨晴竜とこそ云はめ]
- 23 [ひるがほにからりと晴れて誕生日]
- 24 [枯れ薔薇の掠れ鳴りたり薔薇の中]
- 25 [祭の灯わたあめを透けをりにけり]

- 26 〔みづうみの夜の濃かりけり茄子の花
- 〕
- 27 〔午睡僧おのが僧衣のほつれ吹き
- 〕
- 28 〔ぼうたんの揺るる読経でありにけり
- 〕
- 29 〔秋雲や千切れて飛べる雲の中
- 〕
- 30 〔しばらくは役場も早稲のあかるさに
- 〕
- 31 〔蓑虫や北京の月は詩を為さしめ
- 〕
- 32 〔ななかまど見飽きし手品なれど愛す
- 〕
- 33 〔小鳥来るなんかい寝ても同じかほ
- 〕
- 34 〔さはやかに子りす前足より落ちぬ
- 〕
- 35 〔人形にまなうらのなし秋の空
- 〕
- 36 〔秋風や振れば音して万華鏡
- 〕
- 37 〔ポケットに牛舎の鍵や草の露
- 〕
- 38 〔早退や昼の月とはあな白き
- 〕
- 39 〔徒然にして秋草の旅疲れ
- 〕
- 40 〔こほろぎの草喰ふかほが目の前に
- 〕
- 41 〔霧に御手ひとびと目覚めさせむとす
- 〕
- 42 〔ぎんやんま薬をつかみて花揺れず
- 〕
- 43 〔銀漢や眠りつつ聴くおのが息
- 〕
- 44 〔きつつきの木つつく音のつとに尽き
- 〕
- 45 〔雲上は恒のあをぞら朴落葉
- 〕
- 46 〔赤とんぼ荷造りはゆつくりがよし
- 〕
- 47 〔首都おのが光に照りぬ秋の雨
- 〕
- 48 〔晩秋や大きな木に抱きつけば
- 〕
- 49 〔ねむりびとまた一人増え星流れ
- 〕
- 50 〔白菜の張り付いてゐるお玉かな
- 〕

- 51 寒林のその一本や倒れたる――
- 52 おもへらく木枯は木を愛してゐる――
- 53 葉の落ちて落葉のなかへまじりけり――
- 54 望遠鏡たたむ凍星容れたまま――
- 55 教科書のをはりの雪の詩なりけり――
- 56 冬虹の現れはじめを誰も知らず――
- 57 見えながら冬虹消えてゆきにけり――
- 58 冬蜂死す仰臥の胸に脚集め――
- 59 うつし世に照らぬ岸なし竜の玉――
- 60 これよりは旅あかるさの雪の岸――
- 61 中心へ火が燃えすぎる火のなかで――
- 62 火や己がかたちに光満ち尽くし――
- 63 終に火の崩すは焚火自身かな――
- 64 せせらぎをやや凍りつつうごく水――
- 65 冬青空カンフーの息永く疾く――
- 66 凍星なつかし利器灯し確かめよ時刻――
- 67 湯冷めせむ詩人を悼む詩のあれば――
- 68 寒き夜の挿絵をつぎつぎとカリブー――
- 69 ストオブに火の神ゐむか鳴り爆ぜぬ――
- 70 折るべうもなや奥蝦夷は大氷柱――
- 71 冬の夜の小指の纏ふうすあかり――
- 72 詩がよく出来るふるさとの氷る頃――
- 73 ジャケットや華族末裔借家暮らし――
- 74 理論上は吹ける口笛冬のくれ――
- 75 行く雲に卒業証書とはつめた――

- 76 函館に花前線がぶつかりぬ
- 77 黒板に桜描かれて散ることなし
- 78 薄氷の上うつすらと水ながれ
- 79 浅草は花散る猫の身づくろひ
- 80 猫の子が猫の子を見てゐたるなり
- 81 ものの芽につよきみどりの極まりぬ
- 82 春風や淋しきものに腹話術
- 83 それよりは恒に葬後のかざぐるま
- 84 川すじを離れて濡るるすみれかな
- 85 春のソプラノリコーダー目を閉ぢて
- 86 春の夜やピアノにあれば指は疾風
- 87 やどかりに宿貸す貝のあはれかな
- 88 キヤパの忌の雲大いなる夕べあり
- 89 教科書のおもての照りや春疾風
- 90 夜明け未だ夜のごとくあり柿青く
- 91 しあはせの亀に貧しき日永あり
- 92 おりいぶの珈琲の春惜しむべし
- 93 乾びゐて寓意となれる蜂なりけり
- 94 ひなまつり母早逝の家系あり
- 95 酔うて言葉は薩摩のそれや花の雨
- 96 春の夜の字幕の愛のつたなけれ
- 97 見たらし引く見たらし団子春のくれ
- 98 わするな草ねむりは橋をゆくやうに
- 99 ふらここをうつすおほきなにはたづみ
- 100 葉一片風の柳を離れけり